

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	粟 谷 好 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>教育実習生の中等社会科授業構成力の向上を目指す ルーブリック開発のアクション・リサーチ</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 草 原 和 博</p> <p>審査委員 教授 木 村 博 一</p> <p>審査委員 教授 棚 橋 健 治</p> <p>審査委員 准教授 川 口 広 美</p> <p>審査委員 准教授 永 田 忠 道</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本研究は、中等社会系教科目（以下、社会科）教員志望の教育実習生（以下、実習生）の社会科授業構成力の向上に資する教育実習のルーブリック開発を目的としたものである。本論文は、5つの章で構成されている。</p> <p>第1章は、教育実習の実践的課題の考察である。</p> <p>実習生が何に悩み、どこでつまづいているのかを解明するために、実習生2名を対象とした半構造化インタビューを実施した。調査の結果、具体的な到達点が見えないまま闇雲に教材研究しているという意識、指導教員が後出し指導をしているという感覚、指導教員による強制と指導の見きわめの困難さ、実習で達成できたことについての自己認識の曖昧さなどが示された。この結果を受けて本研究では、指導教員と実習生の関係をいかに再構築し、双方が実現したい社会科授業のあり方を共有し、そして評価の妥当性を高めていくかが、研究上の課題として確認された。</p> <p>第2章から第5章は、課題を受けた4次に渡るアクション・リサーチである。</p> <p>第2章では、指導教員が評価の主体となって、チェックリスト型ルーブリックを実習生に与えた場合の、教育実習の効果が検討された。教員養成スタンダードやルーブリック等を集約し、それを帰納的に分類し、大分類と小分類に整理された評価項目は36項目に達した。分析の結果、ルーブリックによって実習生の実習準備の闇雲さは軽減されたこと、一方で、評価項目（規準）を満たせばそれによしとする実習生が存在したこと、また評価項目の参照の程度にはバラつきが大きく、社会科観の省察を求める規準や難解な専門用語を含む記述語は、ほぼ参照されていないことが明らかとなった。</p> <p>第3章では、引き続き指導教員が評価の主体となって、4領域に構造化されたルーブリックを実習生に与えた場合の、教育実習の効果が検討された。「技術的熟達者」と「適応的熟達者」の理論に準拠し、規準が精選・序列化されたルーブリックが提示された。分析の結果、実習生は定型的熟達者の水準には到達したが、適応的熟達者の水準には至らなかったこと、その原因として社会科観の省察に関わる規準は引き続き参照されなかったこと、</p>			

そもそもルーブリックの存在やそれを使うことに意義を見出せない実習生が少なくないことが明らかとなった。

第4章では、指導教員だけでなく実習生も評価の主体となり、両者が協働してルーブリックを開発・活用した場合の、教育実習の効果が検討された。「自己調整学習」と「真正の評価」の理論に準拠し、実習生自らの「できるようになりたいこと」を規準にルーブリックが構成された。分析の結果、実習生は目標をより高い基準で達成したいという意欲と実際にそれができているというメタ認知が働いていたこと、また、実習生は教科指導の目標設定や内容構成だけでなく、通教科的な指導技術や生徒とのコミュニケーションに関心を寄せる傾向にあり、指導教員の意図との乖離が顕在化したことも明らかとなった。

第5章では、引き続き指導教員だけでなく実習生も評価の主体となり、両者が協働してルーブリックを開発・活用した場合の、教育実習の効果が検討された。ルーブリック作成に当たっては、実習生が理想とする社会科授業を語る「エイムトーク」の欄を設け、目標と指導案や実践を行き来できる仕組みを構築した。分析の結果、実習生は、自ら設定した社会科目標を参照しており、実習授業の機会が増すごとにそれと指導案は整合するようになったこと、しかし実習中は精神的なゆとりを欠き、目標を書き直したり、規準の意味を問い直したりする機会は認められなかったことが明らかとなった。

終章では、アクション・リサーチの結果を踏まえ、教員養成の改善プランが提案された。具体的には、教育実習の評価対象として、実習生が作成するルーブリックとその活用・改善のプロセスに注目すること、教育実習で形成すべき社会科授業構成力を、学習指導案を開発・展開できる能力だけではなく、自己の社会科観を言語化し、それに基づいて実践を評価・改善できる専門性にまで拡張すべきこと、また教職課程のカリキュラムは、大学や国・教育委員会、企業等の求めとの対話を通して、各実習生がルーブリックを作成し、カスタマイズしていけるように編成されるべきことを提起した。

本論文は、以下の3点で高く評価できる。

- (1) 教育実習の課題と改善策を、教育実習指導の当事者によるアクション・リサーチを通して実証的に解明したこと。本研究を通して、学校ベースの実習指導とその評価という新たな研究領域を開拓したこと。
- (2) 社会科教員志望学生に対する指導方略を提起したこと。学術的には意義が語られても、未確立だった社会科教員志望学生のラショナル・ディベロップメントの方略を、ルーブリックの協働開発として具体化したこと。
- (3) 社会科教員の専門性開発のあり方に一石を投じたこと。教師は、スタンダード等の形で外から与えられる規準に自己を適応させるのではなく、あるべき社会科教育の規準を自律的に再構築していく主体であることを確認したこと。それは、学部の教育実習の段階から尊重されるべきことを提起したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和3年 2月 12日